

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第106号

- 中学校，盲・聾・養護学校対象 -

平成18年5月発行

基礎・基本の定着を図る中学校国語科学習指導の充実

- 平成17年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫 -

鹿児島県教育委員会では平成15，16年度に引き続き，平成17年度「基礎・基本」定着度調査（以下「今回」という。）を実施した。

この調査は，学習指導要領が示す基礎的・基本的な内容のうち，「読み・書き・算」等の基礎学力について県全体の実態を把握するとともに，各学校の課題を明確にし，きめ細かな指導法の改善に資するなど，基礎・基本の定着を目的としたものである。

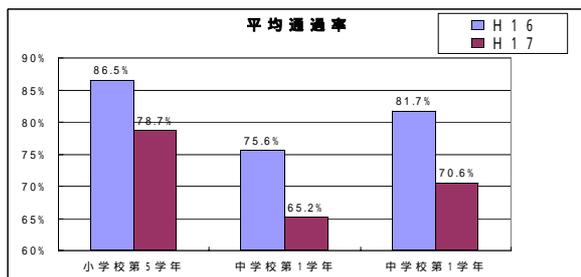
今回も，平成16年度「基礎・基本」定着度調査（以下「前回」という。）と同様に，小学校第5学年で国語，社会，算数，理科，中学校第1学年及び第2学年で国語，社会，数学，理科，英語について，各学年すべての児童生徒を対象に実施した。

そこで，本稿では今回の国語科の結果について前回の結果と比較しながら分析するとともに，基礎・基本の定着を目指す国語科学習指導法の工夫改善について述べる。

1 学力調査の結果と考察

(1) 小・中学校の連携の推進

前回の平均通過率と今回のそれを比較すると，小・中学校の校種間格差が10.9ポイントから13.5ポイントへと拡大して



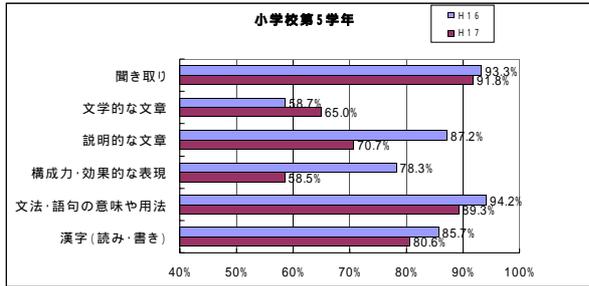
いる。そもそも国語科の指導内容は系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに，螺旋的・反復的に繰り返しの学習を基本としている。しかしながら，その格差が前回よりも拡大しているということは，小学校から中学校へ進学した際に，新入生の多くが中学校の学習指導の内容や指導法に対応できていないということが考えられる。

今後，指導の在り方等を改めて見直し，小・中学校の国語学習の系統性を重視するとともに，相互の連携をより一層進め，中学校第1学年の基礎学力の定着につとめることが大切である。

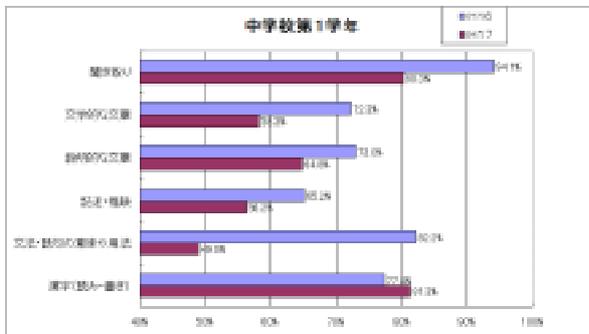
(2) 内容・領域別の結果からとらえる課題

小学校第5学年の内容・領域別の平均通過率をみると，前回，比較的低かった「文学的な文章」に関する内容が，今回，やや向上したものの，全体的にはまだ低

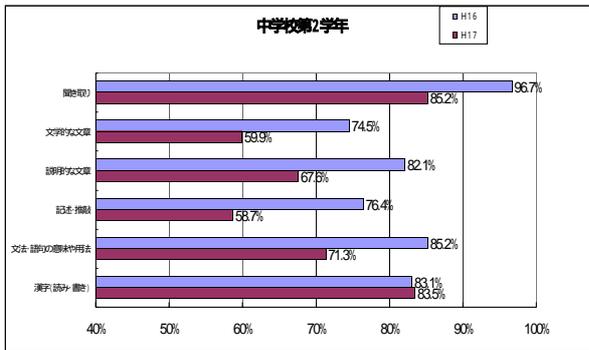
い傾向にある。また、高い傾向にあった「説明的な文章」は、今回低下した。



中学校の通過率をみると、第1学年においては、「書くこと」の領域の「記述・推敲」に関する内容が低下した。また、「読むこと」の領域の「文学的な文章」や「説明的な文章」に関する内容も、前回同様、低い傾向にある。さらに、言語事項の「文法・語句の意味や用法」は82.2%から49.0%と、33.2ポイントも下がっている。一方、「聞き取り」や「漢字(読み・書き)」は前回と同様、おおむね良好の結果である。



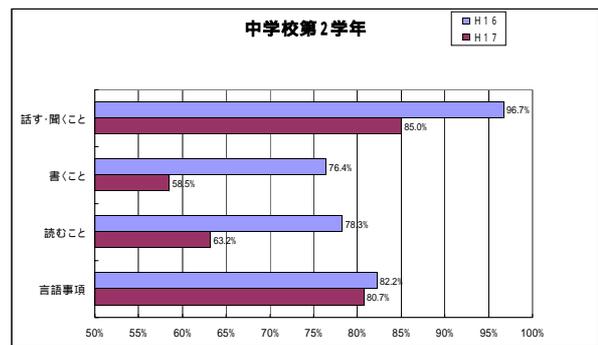
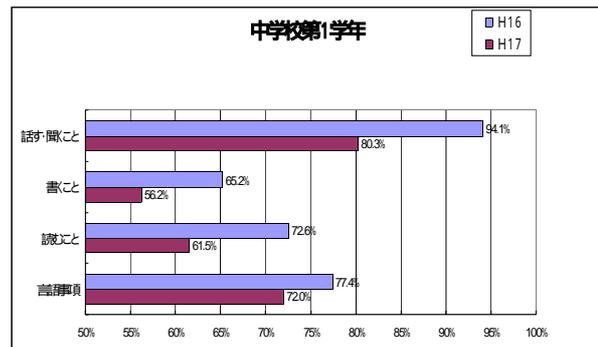
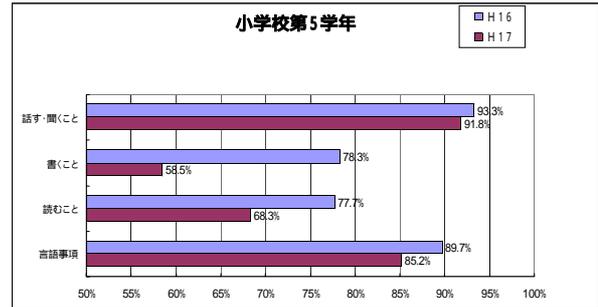
第2学年においては、前回、低調だった「読むこと」の領域の「文学的な文章」と、



「書くこと」の領域の「記述・推敲」に関する内容の通過率が、共に70%台に達した。その他の内容も80%台を示しており、おおむね良好であった。

(3) 観点別の結果からとらえる課題

内容・領域別の結果からとらえた課題は、観点別の調査でも顕著にあらわれている。



「書くこと」の領域の通過率は、3学年共に低下しており、「読むこと」の領域における通過率の低下がそれに続いている。「話すこと・聞くこと」の領域においても低下の傾向が見られるが、小学校第5学年は91.8%、中学校第1学年は80.3%、中学校第2学年は85.0%と、それぞれ高い

通過率を示している。

(4) 正答率の低い問題からとらえる課題

ア 第1学年

(ア) 2の三(通過率; 43.3%)

「あき子の非難と抗議」の内容(本文は省略)として、
あてはまらないものを次から一つ選び、その番号を書け。

- 1 わなをしかけてひよどりを捕ることの残酷さ。
- 2 ひよどりの死体に対するやりとりの無責任さ。
- 3 ひよどりの死体をすばやく処置しない臆病さ。
- 4 むごいことをしたことに気づかない無神経さ。

井上靖著「しろばんば」からの出題。
文章の前後関係や情景描写を基に、
「あき子の非難と抗議」が非人間的な
行為に向けられたものであることを読
み取る力を問う問題である。

選択肢は人間性を手がかりに吟味す
れば明らかに類別できるものである。
誤答が過半数に達した原因として、登
場人物の心情を理解する力とともに、
それを主体的に感じる力の不足が想像
される。

(イ) 5の一(通過率; 14.5%)

文末の表現を、「です・ます」調の敬体に直した方がよ
い所が1か所ある。その文節を文章中(省略)から探し、抜
き出して書け。

これは、敬体で書かれた生徒作品を
読み、部分的に常体で書かれたところ
を探して指摘するという、表現の統一
を問う内容である。すべての設問の中
で、この問題の通過率が最も低い。

誤答傾向をみると、「いた。」と1
文節で解答するところを、「泣いてい
た。」と2文節で解答したものがほと
んどであった。また、「いました。」

などと、常体を敬体に直すなど、問題
の読み取りが十分とは言えない解答も
目立った。

このように、敬体と常体の違いが理
解されていない基本的なものから、文
体の区別や違いは分かっているが、
文節の切り方や抜き出し方を間違っ
たなど、日ごろ、文法に関する基礎的、基
本的な知識が、十分に定着していない
ことがうかがわれるものまで、大きく
二つの課題が明らかになった。

(ウ) 5の四(通過率; 54.0%)

あなたがお年寄りと接した体験を通して学んだことを、次
の ~ の条件にしたがって書け。

(条件)

あなたがお年寄りと接した体験を、具体的に書くこと。
体験を通して、あなた自身が学んだことを書くこと。
原稿用紙の書き方に気を付けて、5行以上8行以内で書
くこと。

題名や氏名は書かないこと。

この設問は、「お年寄りと接した体
験」を基に、自分が学んだことをま
とめて書くという条件作文の問題である。
表現内容はともかく、今後、句読点の
打ち方や原稿用紙の使い方などの技能
面の指導の在り方や文のねじれ現象、
不適切な文末表現、字数条件の無視、
無答(8.2%)などが課題と言える。

イ 第2学年

(ア) 4の1(8)(通過率; 32.4%)

次の各文の一線部の漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に
正しくなおして書け。

8 こんきよを明らかにする。(他の小問は省略)

「根」の字については、ほとんどの

生徒が正しく書くことができていた。しかし、「拋」の字については「てへん」が脱落していたり、「きへん」になっていたりする誤りが見られた。

(イ) 〔5〕の二(正答率; 36.9%)

文章中(省略)の の部分は、1文が長すぎて分かりにくい。分かりやすい表現にするために二つに文を区切るとしたら、最初の一文をどこで区切ったらよいか。1~4から最も適当なものの一つを選び、その番号を書け。

草むらの様子は力強く太いタッチで描かれ(1)生命力が感じられて(2)太陽は描かれていないが(3)川面や土手、灰色の石造りの橋などの部分には黄色や白の筆を入れることで(4)日の光の強さ、輝きを映し出している。

まず、文を通読して内容を「草むらの様子」の部分と「太陽と日なた」の部分に分けることが解答のポイントである。日ごろから一文の長さを適切にし、簡潔に表現する指導を課題としたい。

(イ) 〔5〕の四(通過率; 52.9%)

上の絵について、「アルルのはね橋」の文章(省略)を参考にして ~ の条件に従って二段落で書け。

〔条件〕

第1段落に、画面を見て分かることを書くこと。

第2段落に、絵から受けた感想を書くこと。

原稿用紙の書き方に気を付けて、6以上9行以内で書くこと。

題名や氏名は書かない。

これは絵を見て、文章を参考にしながら条件に従って自分の考えをまとめ、原稿用紙に書くという条件作

文の問題である。今後、資料の比較の仕方や図表の読み取り方など、条件に基づいて自分の考えをまとめる力を育成することが課題と言える。

(5)「PISA型読解力」を試す問題の導入
今回の検査から、国際的な学力指標である「PISA型読解力」を試す問題が導入された。

PISAとは、生徒の学習到達度調査(Programme for International Student Assessment)の略称である。平成15年の調査と平成12年の調査を比較すると、特に、読解力が8位から14位に落ち、「読解力の低下」が指摘された。

【PISA型読解力の定義】

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するため、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

これまで読解力と言うと、作品の情景をとらえ、登場人物の心情を読み取ったり、作品の要旨や主題を把握したりする力であったが、ここで言う「PISA型読解力」とは、文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含む。

今回、「テーマについて検討したことを書く」(小学校第5学年)、「体験したことを条件に従って書く」(中学校第1学年)、「絵を見て参考文献と対比させながら条件に従って書く」(中学校第2学年)など、「PISA型読解力」を必要とする出題が、各学年とも低い結果となった。

2 結果を踏まえた改善策

(1) 言語環境の整備と学習訓練の充実

国語科は言語を主体として授業を展開しており、これまで述べてきた課題は、簡単に克服できるものではない。課題の克服に向けて、整備された言語環境の中で、教師や生徒相互のかかわりが円滑に展開されるよう、年度当初や学期の節目には国語科学習のオリエンテーションを実施し、学び方を学ぶ学習の充実を図りたい。

特に、教師の話法の改善・向上はもとより、生徒の発表の仕方やペア・グループなどでの話し合いの持ち方など、音声言語環境に関する約束事の確認や質の向上にも努めたい。また、板書技術の向上を中核として、ノートの書き方やワークシートの取り扱い、漢字帳、宅習帳、生活記録などの書き方の指導や学級設営等における誤字の一扫など、文字言語環境の改善についても、国語科がリーダーシップをとって学校全体での組織的な取組の充実を図りたい。

(2) 「PISA型読解力」の育成

前述のとおり、これからは収集した情報を精査し、十分に理解した上で自分の考えをまとめ、日々の生活に活用することが求められている。生徒にこのような力を身に付けさせるための改善の視点として、次の4点を紹介したい。

【「PISA型読解力」を身に付けさせるための改善の視点】

ア 目的に応じて理解・解釈する力の育成

イ 評価しながら読む力の育成

ウ 課題に即して資料等を読む力の育成

エ 実践的な言語活動に活用することができる力の育成

ア 目的に応じて理解・解釈する力の育成

目的に応じて理解・解釈させるための着眼点をとらえさせるために、モデルを提示・比較させる。

例えば、

- ・ まず、第2学年で学習する太宰治著の「走れメロス」を読み、気に入った場面を選ぶ。
- ・ 次に、気に入った場面を、自分ならどのように脚本化するか考え、脚本化する。
- ・ 映像化したものを実際に見て、自分が脚本化したところを原作と比較して、映像制作者の意図などについて考える。

このように、小説と映像を比較することで、表現の違いや映像の演出の意図に気付き、そこから獲得した着眼点を他の作品に対しても応用することができる。

イ 評価しながら読む力の育成

評価する立場を設定することは、生徒が筆者の立場でのものの見方、考え方に気付き、主体的な学習を進めることにつながる。

例えば、新聞記者や雑誌の編集者、作家など、職業やその年齢などを特定し、その立場で考えさせることで、状況に応じて考えたり、判断したりする力をはぐくむことが期待できる。

ウ 課題に即して資料等を読む力の育成

学習課題に即して参考とする資料を収集させ、資料の整理に取り組ませる。

例えば、説明的文章の内容に即して調査項目を設定し、その項目に沿って必要な情報を十分吟味し、収集させることで、資料等を読む力の育成につながることができる。

エ 実践的な言語活動に活用することができる力の育成

既成の製品等の取扱説明書や「使用上の注意」などの文章を参考に、生徒が必要とする情報を、それぞれの目的に応じて順序よく表現させる。

例えば、

- ・ 電気製品の取扱説明書を読み、取扱説明の順序について考える。
- ・ ばらばらに切り離れた取扱説明書を製品の特性を考慮に入れながら、適切な順序に並べ換える。

このような活動を通して、表現の工夫（箇条書き等）や順序性、重要度などのポイントについて考えさせ、実践的な言語活動につながるができる。

（文部科学省ホームページ：「読解力向上に関する指導資料」の「具体的な指導例」から引用・参考とした）

(3) 問題解決的な学習の充実

国語科学習指導の充実を図るためには、生徒に主体的に言語活動に取り組ませるとともに、自己の変容を確認しながら学習の進捗状況を常に認識させることが大切である。

【問題解決的な学習の指導過程例】

共通基盤づくり

学習課題の共有、学習の見通しの確認、文章の読みに対する抵抗の解消、登場人物等の共通理解

自己追究

初期段階における自力による学習課題の解決

相互練り上げ

生徒相互の共同学習による解決の深化

自己解決

相互練り上げを基にした自己追究の見直し

特に、**自己追究**の過程においては、生徒の解決意欲を促進するために、課題を設定する学習を充実し、生徒自らが主体的に学習課題を設定できるように指導していくことが大切である。

また、**自己追究**や**自己解決**の過程においては、ノートに書く活動を積み重ねていくことにより、自己の変容に気付くことができるよう、工夫していくことが大切である。

相互練り上げの過程においては、生徒相互がかかわりながら思いや考えを触発することができるよう、ペアやグループなどの場の設定を工夫したり、個々の思いや考えを触発することができる発問を工夫したりするなど、言語活動を活性化させるための工夫に取り組みたい。

今後、各学校においては分析と考察を継続して積み重ね、学習オリエンテーションを充実されるとともに、生徒が自己の変容に気付くことができる具体的な学習指導法の工夫改善に取り組むことを期待している。

（教科教育研修課）

